

井上円了 (1858-1919) は明治中期に西洋哲学の知見を活かして仏教の革新・復興を図ったことで知られる。円了の仏教思想には西洋哲学が決定的な意味を持つが、仏教と他思想との交流というテーマを考えると、もう一つ検討すべきなのが近代科学 (円了の言葉では「理学」) と仏教の関係だろう。

円了は『仏教理科』 (明治 38 年[1905]) の中で、「今後は仏教を世界の学問、世界の宗教として研究せざるをえざれば...その中に存する天文地理等の諸説を」研究する必要があると言う。中でも「到底虚妄の評を免れ難きもの」としての「須弥山説」と、「六道輪廻説」とを「今日、仏教が世界に立ちて世の学術と共に勇進競争」する上で直面する二つの「衝突問題」だとする。このうち特に「須弥山説」についてはすでにいくつかの優れた先行研究があるが、本論では「六道輪廻説」の解釈と併せて検討することで、近代科学が描き出す世界と仏教が説く世界とが衝突した際、円了がそれをどう解決しようとしたか、主に『仏教理科』を手掛かりに改めて見直してみたい。

「須弥山説」について円了は、結論としては「波羅門の旧説」で「理学の実験」からして「道理に反するのは論を待たざるところ」だとし、「天界以上に仏果の世界」があることを示すための「方便」に過ぎないとする。ただし仏者に対しては、「凡眼」と「天眼」が見る世界の違いであるなどと説明することはできるとする。結局のところ「須弥説の立つと立たざるとは、仏教そのものの利害を離れたる別問題」だとし、「須弥山説」は重大視する必要はない円了は結論づける。

一方、「六道輪廻説」は「到底世論のいるるところにあらず」 (『仏教理科』) と認めながらも、「因果論」「靈魂不滅論」「唯物／唯心論」とも密接に関わる重大な問題として『妖怪学講義』 (明治 26 年) や『破唯物論』 (明治 31 年) などでも論じている。円了は「物質は不滅なれば身また不滅」だとしてエネルギー保存則から靈魂不滅を科学的に説明する一方で、仏教では「無形かつ不生不滅の真如が天地万有の本体」だとし、「誤りて生死の習慣性を作り...六道生死の迷い子となる」と主張する。ただ、死後の世界は不可見であり、「仏眼」を開くことでしか知ることができないとする (これは「須弥山説」の解釈では仏者向けの方便的な論法)。「須弥山説」の合理的な解釈に比べ仏教の教理に偏するが、それは円了が死後の (輪廻の) 問題を宗教の課題と捉えていたからだろう。宗教は「人心中に不可思議の实在を想出し、これに依憑して安心せんとするより起こる」 (『破唯物論』) と円了は言う。円了の関心は、単に仏教を科学的検証に耐えるよう合理化・近代化することではなく、『仏教理科』の末尾に言うように、「生死 (の) 路頭の迷い人」に「不生不死の智眼を開かしめ」安心立命に導くという、円了が信じる仏教の根幹を開頭することにあつたのではないだろうか。

(キーワード) 井上円了、須弥山説、六道輪廻、科学